

博士學位論文

内容の要旨
と
審査結果の要旨

2014

国際基督教大学

氏名	LANDAU, Samantha H. (ランダオ, サマンサ)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第184号
学位授与年月日	2014年6月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Uncanny Houses, Sinister Homes - the Architecture of Feminine Anxiety in Gothic Literature- (不気味な家・怪奇な住居 —ゴシック文学における女性の不安の表象—)
論文審査委員	主査 上級准教授 生駒 夏美 副査 教授 榎本 眞理子 (恵泉女学園大学) 副査 特任教授 大西 直樹 副査 教授 ツベタナ I. クリステフ

論文内容の要旨

本論文は18世紀に隆興したゴシック文学の伝統の中でも特に **Female Gothic** にあらわれる家の表象に着目し、家のモチーフが家族観や家族における女性観の変化に由来する不安の居所として機能している様子を辿った。特に、18世紀、19世紀、そして20世紀と時代が移るにつれ、家父長的家族もその姿や女性管理の方法を変えていき、ゴシック文学における家も城、屋敷から核家族の一軒家へと変化する。この「家」という物理的空間は、社会における家族のユニットを包含するものであり、公的領域と私的領域を分割する境界線として機能すべきものであるのだが、中に住む人間よりも耐用年数が長く、従ってゴシック文学においては過去の亡霊を内包するものとして想像されている。18世紀以降の激しい社会変化の中で、家は内と外、自己と他者、親しいものと見知らぬもの、新と旧が摩擦を起こす場所となり、社会の周縁に位置づけられた女性たちが感じる存在不安や役割の揺らぎを増幅させた。本論文は、不気味な家 (**uncanny houses**) が時に彼女たちの不安のゆりかごとなり、また時には彼女たちの戦友となって家父長制社会の圧政への破壊力を提示する様子を時代と社会の変遷を踏まえながら分析した。

まず本論はゴシック文学の伝統における家の意味を再考した。家は家族観や女性観と

密接に結びつき、女性のジェンダー役割を規定する場所となっている。しかし、ゴシック文学に登場する家は過去の遺産を内包し、安心感や育みの舞台ではなく、不気味な出来事や犯罪の温床となり、家族に存在する違和や軋み、歪み、価値観の相克、また家族内での女性の抑圧を露出する装置となる。

第一章はゴシックの歴史を起源まで遡ることから始める。産業革命が進行し合理性と生産性を優先する社会に変貌する中で、中世の城や封建社会を舞台とするゴシック文学が人気を博した背景には、過去への郷愁とともに、不合理な現象への不安が共存している。しかし男性作家の手によるゴシック小説が、超常現象の不気味さに焦点を当てるのと対照的に、例えば Ann Radcliffe のゴシック小説は、不安をきっかけにしてヒロインを旧態依然の家父長制社会から脱出させ新たな秩序へと導く。つまり uncanniness は女性にとって特別の契機を提供していることになる。フロイトの The Uncanny 論を援用し、本論は不安の重層性と主観におけるその役割を指摘する。

また本論はゴシック小説の創始者 Horace Walpole が実際にゴシック風邸宅を建築したことと John Ruskin のゴシック建築論を接続し、物理的な「家」という空間とそこに 19 世紀の英国で見いだされた倫理的意味合い、特に男女の役割分担について考察する。社会が流動性を増す中で、家族の砦としての家とそれを守るべき女性の役割が強化される中、当時の Neo Gothic 文学は家がさらなる相克の舞台となる様を描写する。Emily Brontë の『嵐が丘』は家父長制が一人の孤児の登場によって転覆される様子を描く。女性が家系の財である家父長的結婚制度において、身分違いの Heathcliffe と Catherine の愛は家父長制を破壊するエネルギーとしてヴィクトリア朝の家に取りつく亡霊となる。一方、Charlotte Brontë の『ジェーン・エア』では、主人公のジェーン自身が家父長制を乱す存在である。しかし、彼女の破壊力はダブルであるバーサに転移され、後者の死と遺産相続によってジェーンは、財としてではない結婚を実現する。

第二章は 19 世紀のアメリカ詩人 Emily Dickinson の作品における家のモチーフを分析する。ゴシック小説の読者であった Dickinson の作品において、家はゴシック小説にあるのと同様に不安と慰めの源泉である。また Dickinson においては家が心の内部を描写するとき使用されている点も指摘され、家父長的宗教における排除や喪失の不安が、当時のアメリカ社会の中で家に過剰に付与された「安心感」「一体感」への疑念と共に表出している様子が検討される。

第三章は 19 世紀末にアメリカで発表された短編 “The Yellow Wallpaper” を分析する。この作品中に登場する屋根裏に閉じ込められた狂女のイメージは言うまでもなく『ジェーン・エア』から派生したものである。この作品において、語り手の女性はうつ状態の治療と称し、夫から書くことを禁じられ、ゴシック風の一軒家に軟禁されて、壁紙に狂

女が幽閉されているとの幻覚を見るようになる。物語の最後には狂女と語り手は一体化し、夫を衝撃に陥れる。この短編においては、男性による女性の知的活動の禁止と、女性のそれからの脱出が描かれるのだが、ゴシック風の家がその舞台となっているのは偶然ではない。家はまさに女性自身が社会から求められるジェンダー役割と葛藤を強いられる場なのである。

第四章は二部構成となっており、前半部分は第二次大戦前に書かれた *Daphne du Maurier* の『レベッカ』を分析する。この小説においても女性の狂気とエイジェンシーがゴシック風屋敷を舞台に葛藤を繰り広げる。家父長制とこれに対抗する女性の意志が、むしろ後者を悪役とした形で描かれる。『ジェーン・エア』を彷彿とさせる結末部分での屋敷の焼失はしかし、『ジェーン・エア』のように主人公に秩序の再建をもたらすというよりは、家父長制の崩壊と喪失感を強めており、語り手の女性の混乱を強く印象づけるものとなっている。

後半部分は 60 年代にアメリカで書かれた *Shirley Jackson* の二作品を検討する。*We Have Always Lived in the Castle* には、家族殺しの舞台である家で生活する姉妹が描かれ、家や財産を巡って従兄弟や村の人々とのいざこざが起こる中、引きこもる姉妹の不気味な姿が描かれる。この小説では女性が家父長的家庭／社会の破壊者であり、しかし最終的に代替の「家」は描かれない。また *The Haunting of Hill House* においては、家が失われた母として狂気をはらみ、焦点人物の女性を自殺に追い込む。前作と同様に、内部にいた家族は腐敗し崩壊し消失したのにも関わらず、亡霊の棲む家だけが残る。

第四章で扱われた作品群は特に、家族のめぐる犯罪や狂気・死を「育む」場所として、家に強大な力が付与されている。この不気味な家を舞台として、アイデンティティの危機、既存のジェンダー役割からの脱出、新たな価値観の創造が模索されている。特に母と娘の葛藤や独立への渴望と不安が、理想の「家」の持つ安定を揺るがせ、最終的には転覆させるとした。

結論ではこれまで展開してきた論をまとめた上、文学における家のモチーフをさらに包括的に見るためには、今回研究対象とした以外のゴシック文学作品、特にロシア文学や日本文学、ドイツ文学でのゴシック作品も分析する必要性が述べられた。

論文審査結果の要旨

2014年5月23日、生駒夏美、榎本真理子、大西直樹、ツベタナ I. クリステワの各教授からなる博士論文審査委員会の審査が開かれた。審査では、冒頭にランダオ氏から論文について概要的な説明が行われた後、審査委員会から個別に質疑応答が行われた。

審査委員会は、まず本論文が2014年1月27日に行なわれた中間報告審査においては、論文体裁上の問題点と共に、各章の論点の接続点が必ずしも明確になっていないことが指摘されたが、今回提出されたものでは問題点の大部分が改善されていることを高く評価し、ランダオ氏が研究者としての責任を果たしたことを認めた。

さらに審査委員会は、本論文が女性作家の手によるゴシック小説という伝統を研究したものである独創性を評価した。ゴシック文学の研究は多くなされているものの、多くは男性作家の作品を研究の中心に据えており、女性作家の特異性に着目したものは少数に留まっている。本論文は従ってゴシック文学の研究領域において貢献するものである。また、本論文が様々な理論を巧みに用い、研究対象のより良い理解につなげている点も高く評価した。また英米の二領域の作品を比較的に扱った点も高く評価されたが、本論文がアメリカ文学とイギリス文学の共通点を前面に押し出す一方で、それぞれの文化の独自性、特にイギリス文化の歴史的重層性やゴシック建築の伝統などへの考察が不足している点が指摘され、今後の課題としてランダオ氏に伝えられた。また事前審査の際に指摘された問題点がほぼ全て改善された最終稿を提出したことについて、審査委員会は高く評価し、研究者としての資質を認めた一方で、序論と結論についてはまだ改善の余地が残るとした。このように審査委員会はランダオ氏の論文を評価した上で、審査は個別の質疑応答に移った。

大西教授は、ディキンソンの章において戸口を出入りするイメージが特に詩の分析と有機的に接続していることを評価した上で、女性作家の手によるゴシック文学に男性作家の手によるゴシック文学からの影響はなかったのか、また前者と後者の相違はどういったところにあるのか尋ねた。これに対してランダオ氏は男性作家の描くゴシックにおいて、恐怖が **terror** あるいは **horror** であるのに対して、女性作家の描くゴシック文学に現れる恐怖はより不安感 **anxiety** に近いものであり、それは女性と家のジェンダー的な強い結びつきと無関係ではないのではないかと応答した。また問いの前半については、今後の研究課題としたいとした。さらに大西教授は建築的に見てイギリスの家とアメリカの家が大きく異なっている点を指摘し、その相違がどのようにそれぞれの作家に影響

しているかについて尋ねた。これについてランダオ氏は、確かにマナーハウスのようなものがアメリカにはない一方で、郊外の家という概念にゴシック的なものを見る傾向があるとし、また今年になってこの分野で研究書が出版されたので、今後の研究課題としたいと応答した。

次に榎本教授は、『レベッカ』の語り手が、本当に家父長制の支持者であるのか、語る行為をすることによって逆に家父長制を脅かす存在として読むことが可能ではないかと質問した。ランダオ氏は、女性が創造性を持つことと家父長制は対立することは *The Yellow Wallpaper* でも明らかであり、『レベッカ』においてもそうである可能性があるため、今後考察を深めたいと応答した。さらに榎本教授は『嵐が丘』において、肉体がキャサリンの牢獄として捉えられると指摘し、肉体と家を接続して考察できないかと尋ねた。これに対してランダオ氏は、『嵐が丘』における家の描写は奇妙な怪奇性を持ち、肉体とも重なる部分があると応答した。また榎本教授は、家以外の空間（荒野、海辺など）への考察が不足しているとの指摘があり、ランダオ氏は今後の課題としたいと応答した。

つづいてクリステワ教授は女性作家によるゴシック文学が 18 世紀に登場した必然性について、より考察を深める必要性を指摘し、特に中産階級の隆興と読者層についてゴシック文学との関連を研究するように薦めた。ランダオ氏はこれに対して、当時の女性たちがゴシック文学の消費者であった点とゴシック文学の書き手としても登場した点を、その歴史的背景と共に考察する必要があることを認め、今度の研究課題としたいと応答した。また、クリステワ教授は *The Yellow Wallpaper* とジャクソンの短編小説が共に日本の読者に共感を呼ぶ作品であることを指摘し、将来日本の読者層へこれらの作品を紹介する可能性について尋ねた。ランダオ氏は本論でジャクソンを取り扱った理由の一つは、日本であまり認知されていないジャクソンの短編を文学研究対象に値する存在として取り上げたかったことであると述べ、日本読者への紹介に努力したいと応じた。

生駒教授は、本論は『ジェーン・エア』の結末を家父長制とは異なる秩序の誕生として積極的に評価しているが、ジェーンがロチェスターとのロマンティックな愛を成就させるためにバーサを犠牲にしたとも解釈できると指摘し、結末の曖昧さを考慮すべきであると指摘した。家父長制度において女性同士が対立させられるのはフェミニズムが指摘してきたことであるが、『ジェーン・エア』でも『レベッカ』でもその対立が見られる。前者は従って、フェミニスト文学の原型と呼ばれることも、アンチフェミニスト文学と呼ばれることもある。このような批評史を考慮に入れた上で、結末の解釈を深めることが重要ではないか。これに対して、ランダオ氏はゴシック文学における結婚制度について、より詳細な分析が必要であると認め、今後発展させたいと述べた。生駒教授は

また、ディキンソンの章において、当時の開拓民の間でもたれていた宗教観についての考察も有用ではないかと尋ねた。特にヨーロッパのキリスト教観との違いや、ディキンソンを取り囲んでいた宗教観がどのようなものであったのか（家父長制）、それが愛国精神、アメリカ人というアイデンティティの創設とどのように関係しているかは、十分に考察に値するし、ディキンソンの詩の解釈の助けとなるのではないかと尋ねた。ランダオ氏はこれに対して、当該の章の歴史的考察がさらに深化する余地のあるものであると述べ、今後研究を深めたいと応答した。さらに生駒教授は、『レベッカ』の結末部分も曖昧であり、本論の言うように語り手の勝利と言い切れない点を指摘した。またレベッカが「人に公開することによって維持を計る貴族の屋敷」の有能な支配人であったことを指摘し、そうしたビジネスマンとしての側面も考慮すべきと指摘した。これに対してランダオ氏は、『レベッカ』には屋敷の公開についての記述が確かに存在しており、レベッカというキャラクターの分析に有用であると認め、今後発展させたいとした。

以上、様々な問題点や改善ポイントが挙げられたが、審査委員会はランダオ氏の研究が博士論文として高いレベルのものに達しており、「女性作家のゴシック文学」の研究に大きく貢献するものであるという結論に達した。出版するに際しては加筆と修正が必要であるとし、ランダオ氏も出版のような加筆修正の機会が与えられるならば、審査委員会から与えられたコメントを反映すると約束した。

審査委員会は国際基督教大学教育研究棟 257 号室において、2014 年 5 月 23 日 13 時 50 分から 15 時 50 分まで一般公開で最終口述試問を実施し他の大学院生も出席した。引き続き審査委員による最終判定を行った。その結果、提出論文は博士論文に値するに十分な内容を持ち、また学位申請者が自立的で高度な研究能力を有することを認めて、全員一致で本論文を博士論文として合格と判定した。